

留学生歓迎会によせて

京都造形芸術大学学長 尾池和夫

京都は、今から約1300年前、秦氏という一族が、まず酒の神である松尾大社を祀り、次に稲の神である伏見稲荷を祀った頃から、都市の歴史が始まりました。8世紀には日本の都が置かれ、長期にわたって繁栄し、京都は今でも近代都市として発展を続けています。京都市は、世界で1番行ってみたい都市にも選ばれ、たくさんの所から、たくさんの人たちが来て滞在しています。

17の世界遺産のある京都の地域へ来られた皆さんを、こころから歓迎しつつ、この瓜生山学園にお迎えしたいと思います。

今日は皆さんに、私から、2つのことを提案します。

まず第1の提案です。皆さんは今日から、この大学の学生証を持っています。それを大いに活用して京都の町を楽しんでください。学生証を見せると、無料で入場できる博物館や美術館がたくさんあります。この大学から一番近い大学は、国立京都大学ですが、その総合博物館では秋の企画展が始まっており、そこに皆さんは、ただで入ることができます。学生証で入ることを私が特に勧めるのは、裏千家財団法人今日庵の茶道資料館です。そこへ行くと、茶道のお点前と美味しい和菓子を頂くことができます。

京都はこれから錦秋の都となります。今、桜紅葉が始まりました。紅葉は秋の季語です。私の第2の提案は、俳句を詠むということです。世界で最も短い詩の形式が俳句です。たった17音で、5音、7音、5音のリズムで詩を詠みます。ルールは単純で、季語を1つ入れるということです。例えば、秋は京都の空が青く澄み、高く見えます。「天高し」という季語で、それを表現します。次に、自分が見たものを詠むということ、575のリズムで詠むということが基本のルールです。

俳句の基本は、あらゆるものへの挨拶です。例えば、皆さんの入学したこの大学は、瓜生山にあります。そこへ世界から集まってきてくださった皆さんを歓迎して詠むと、<瓜生山へ友つどいけり天高し>となります。今、金木犀が咲いています。<白川の角を曲がれば金木犀>。銀閣寺の近くから哲学の道を歩くと、昔、日本画家の橋本関雪が植えた桜が紅葉しています。<哲学の道桜紅葉の道となる>というように、575のリズムで、さまざまの俳句を詠んで、日本語の微妙な心を味わってみてほしいと思います。

いずれにしても、京都造形芸術大学に在籍している間に、たくさんの友だちを作って、交流してほしいと願っています。このキャンパスでの学習が、稔りあるものとなることを願って、私の歓迎の挨拶といたします。ありがとうございました。